「独眼竜」を再び―大河ドラマの実現に向けて

伊達政宗公没後400年を迎える令和18年（2036年）に、その生涯をテーマとした新たな大河ドラマの実現を目指して、10月14日、「伊達政宗公の大河ドラマを誘致する会」が設立されました。

本会は、伊達家にゆかりのある自治体や関係団体全59会員で構成。各団体が連携しながら放送局への働きかけやゆかりの地の魅力発信などを行い、誘致の機運を高めることなどを目的としています。

同日に仙臺緑彩館で設立総会が行われ、会長を務める郡市長は「誘致活動を通じて、政宗公の魅力を全国に発信し、地域の活性化、観光振興、さらには歴史文化の継承につなげたい」と誘致の意義を語りました。また、東北大学名誉教授・平川新氏による記念講演が行われ、政宗公の生涯やその歴史遺産の魅力を共有しました。

今後は誘致の実現に向けてイベントなどで署名を呼びかけ、100万筆の署名を目指します。

▲自治体の首長など約80人が参加した設立総会

▲（写真左）会場では大河ドラマ「独眼竜政宗」で使用された刻字と台本を展示（写真右）伊達武将隊による勝ちどきも上げられました

誘致活動や署名について詳しくは市ホームページをご覧ください

心の壁を越える交流体験―心のバリアフリー授業

市では、市内の小・中学生を対象に、障害のある方との交流を通して障害への理解を深める「心のバリアフリー推進事業」を実施しています。

10月6日に北中山小学校で、宮城県障害者総合体育センター所長で東京パラリンピック車いすバスケットボール日本代表女子チームのヘッドコーチを務めた岩佐義明氏、車いすバスケットボール日本代表候補の伊藤明伸選手との交流会が行われ、4年生の児童72人が参加しました。

初めの講話では、岩佐所長が通常の車いすとスポーツ用車いすの違いや、車いすを使用している人にとって街中の段差が大変なこと、それを乗り越える技術を身に付けていることなどを説明。続いて伊藤選手が車いすでの走行やシュートを実演すると、スピード感あふれる動きと巧みな車いす操作に児童から感嘆の声が上がりました。

その後、実際に児童が車いすに乗り、操作やシュートを体験。最後に伊藤選手と一緒にミニゲームをして盛り上がり、楽しみながら車いすでのスポーツについて学んでいました。また、児童たちは、休憩時間にも伊藤選手に話しかけるなど、積極的に交流を楽しむ姿が見られました。

▲慣れない車いすの操作をしながらシュート体験をする児童

交流会後、児童からは「車いすを動かすこととバスケットボールを一緒にやるのが難しいけど楽しかった。家族や友達にも伝えたい」といった感想が聞かれました。

地域の防犯活動に貢献された方を表彰

市では、10月15日に行われた全国地域安全運動第37回仙台市大会で、6団体・86人の方々を表彰しました。このうち、防犯功労団体、防犯功労者、退任感謝状を贈呈した方は、次のとおりです（順不同・敬称略）。

〔防犯功労団体〕 北光親和会、大野田防犯協会、木町通地区防犯婦人部、大梶町内会防犯・交通部、市名坂町内会、松森台町内会

〔防犯功労者〕 加藤久枝、鈴木邦子、加藤武彦、石川康、髙橋則景、富谷正雄、相澤清二、日下部政代、早坂仁、阿部靖彦、佐藤七郎、髙橋昇

〔防犯指導隊員・防犯女性部員退任〕
天内昭仁、佐竹元春、眞壁寅雄、菅原裕一、髙島新、青山昭司、大野佳伸、東海林敏男、大松澤徹夫、瀬戸武男、小島清一、佐藤好紀、桜井富男、鷲尾裕次、船渡代志子、横山ヤエ、髙橋征子、笠原和子、今野恵子、赤坂信子

新しい宮沢橋の姿に迫る―現場見学会を開催しました

9月13日、現在建設中の「宮沢橋」の工事現場の見学会を開催しました。

広瀬川に架かる宮沢橋は、公共交通を中心とした交通体系や、災害時も含めた人流・物流などの都市活動を支える道路ネットワーク整備の一環として架け替えが進められており、橋の上の道路は、現在の片側1車線から片側2車線へと拡大されます。

見学会には、こどもから大人まで466人が参加。普段は立ち入ることのできない工事現場を見学しながら進捗状況の説明を聞いたほか、最新の土木技術に触れる体験や、重機の乗車体験なども行われ、新しい宮沢橋の広さを実感できる貴重な機会となりました。

新しい宮沢橋は現在の橋の上流約30メートルの位置に建設しており、令和8年9月に開通を予定しています。

▲建設中の宮沢橋（写真手前）。橋の色は現在の「赤色」を受け継ぎます

名誉市民の小田滋氏がお亡くなりになりました

東北大学特別栄誉教授の小田滋氏が9月4日、100歳でお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

小田氏は東京帝国大学法学部を卒業後、米国エール大学への留学などを経て、昭和34年に東北大学法学部教授に就任し、教育・研究に尽力されました。昭和43年には国際司法裁判所での「北海大陸棚事件」において、西ドイツ政府の弁護人として活躍。また、昭和51年から27年間、同裁判所裁判官、平成3年から4年間、同裁判所副所長を務め、国際紛争の平和的解決に貢献され、平成16年に仙台市名誉市民の称号を受けられました。

その功績は高い評価を受け、平成15年に瑞宝大綬章、平成24年に文化勲章などを受章されています。

3・11震災文庫を読む 83

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

体験談が伝える命の尊さ、愛おしさ

行政書士・カウンセラー　樋口　千恵

「魂でもいいから、そばにいて 3・11後の霊体験を聞く」

奥野修司／著
新潮社　刊

震災の被災地で「故人の壊れた携帯からメールが届いた」などの、被災者の体験を丹念に拾い集めたドキュメンタリーです。一見、不思議な話ばかりですが、体験した方々にとっては紛れもない「事実」です。読み進めるにつれて、理不尽な出来事によって絶望の淵に立たされた方々にとっては、科学的根拠に基づく議論などよりも、どのような形であろうと愛する人と「つながっている」感覚を持てることが心の救いになる、ということを実感します。

大災害の体験譚（たん）は、震災とその後の過酷な現実の中で、生者と死者が此岸（しがん）と彼岸を行きつ戻りつしながら、手探りで道を探していく再生の物語でもあります。

「遺体―震災、津波の果てに」

石井光太／著
新潮社　刊

東日本大震災直後、急きょ、安置所とされた岩手県釜石市の中学校の体育館で、遺体の捜索・受け入れや身元確認、遺族への引き渡しのため奮闘した職員や医師、住民の方々を取材したルポルタージュです。

内容は生々しく、読むのがつらくなるほどですが、自らも被災し、肉体的・精神的な限界に直面する中、膨大な犠牲者のご遺体の尊厳を守りつつ、なんとかご遺族に帰したいという、尊く強靱（きょうじん）な思いが、凄惨（せいさん）な状況を支えています。

過酷な現実が押し寄せる中で、登場する方お一人お一人が安置所で奮闘する姿に胸を打たれるとともに、災害の悲惨さと命の尊さを改めて突き付けられる一冊です。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます　問市民図書館☎261・1585